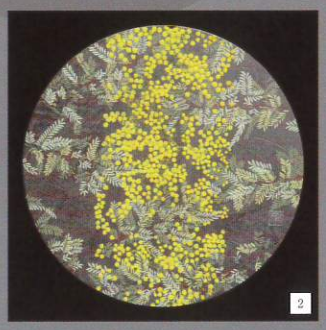
～もののあはれ～ 春

2024年3月16日(土)～24日(日) 10:00～18:00 ※最終日16:00まで ※木曜休廊

1 安藤由香「凛と咲く」
2 磯部絢子「mimosa-春の香-」
3 上村光「Firework」
4 杉野郁「うららなふりして」
5 田中香里「来客」
6 橋本絵里奈「泡沫」
7 初瀬博輝「春に向けて」
8 福村飛鳥「フリージア」
9 山根昇「薔薇」 敬称略



「本居宣長四十四歳自画自賛像」
（本居宣長記念館収蔵作品）

物の哀れ （読み）もののあわれ

もの【物】の 哀(あわ)れ

［一］ 物事にふれてひき起こされる感動。多くは「おかし」「おもしろし」などの知的興味やはなやかさの感覚とは違った、しめやかな感情・情緒についていう。

① 人の心を、同情をもって十分に理解できること。人情の機微のわかること。また、その人情、愛情など。
※土左(935頃)承平四年一二月二七日「楫取、もののあはれもしらで〈略〉はやく往なんとて」

② 物事にふれて起こる、しみじみとした回顧の感慨。
※宇津保(970-999頃)内侍督「よろづ物のあはれなむ思ひいでられ、昔の人の声などおもほえ」

③ 物事や季節などによってよび起こされる、しみじみとした情趣。折からの感興。
※拾遺(1005-07頃か)雑下・五一一「春はただ花のひとへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる〈よみ人しらず〉」

④ 何かに深く感動することのできる感じやすい心。情趣や風流を理解し感じとることのできる情緒的教養。
※枕(10C終)一三五「清範、講師にて、説くことはたいと悲しければ、ことにもののあはれ深かるまじき若き人々、みな泣くめり」

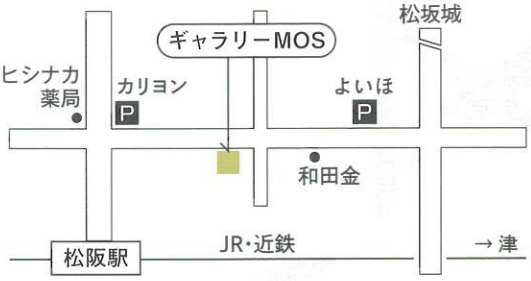
⑤ 悲哀や同情を感じさせるような気の毒なさま。
※浮世草子・好色一代男(1682)四「物(モノ)のあはれをとどめしは、去大名の、北の御方に召つかはれて、日のめもついに、見給はぬ女郎達や、おはした也」

［二］ 本居宣長が提唱した、平安時代の文芸の美的理念。外界である「もの」と、感情を形成する「あわれ」との一致する所に生ずる調和した情趣の世界を理念化したもの。自然・人生の諸相にふれてひき出される優美・繊細・哀愁の理念。その最高の達成が「源氏物語」であると考えた。
※紫文要領(1763)上「これすなはち物語は、物の哀をかきしるしてよむ人に物の哀をしらするといふ物也」

［補注］ 「あはれ」は、古くは感動詞として、喜・怒・哀・楽のすべてにわたって発せられる言葉だったが、「もの」がつくと、「もののあはれ」も「もののあはれ」も、「哀」に限定されるようになる。

出 典 精選版 日本国語大辞典精選版 日本国語大辞典について

オンラインでの展示、販売も同時開催します。
こちらからご覧ください。



■松阪駅西口から徒歩7分

ギャラリー MOS

www.matsumotokamiten.com

松本紙店
〒515-0083 三重県松阪市中町1870 松本紙店2階
TEL:0598-21-0603